

# スポーツイベントが参加者のスポーツライフスタイルに与える影響に関する研究 —ランニングイベントに焦点を当てて—

スポーツビジネス研究領域

5017A074 劉暢宇

研究指導教員 木村和彦 教授

## 1. 序論

近年、健康への関心が高まり、身近のスポーツイベントに注目が集まっている。2007「東京マラソン」をきっかけに、日本においてランニングブームが起こり、ランニングイベントが数多く開催されている。スポーツイベントの開催は、地域住民や参加者に活力を与え、健康の保持増進への寄与へつながっていくと示した(大塚, 2012)。そのため、年々増加しているランニングイベントはより多くのランニング実施に導くことができるのではないかと考えた。しかし、笹川スポーツ財団が発表した調査では、年に1回ランニングを実施するランニング人口が減少した。全体的にランニング実施率が低下していることがみられる。ランニングイベントが増加しているのに対し、ランニング実施が減少している。ランニングイベントの開催はランニング実施の促進につながっていないのかと考えた。それゆえ、参加者のランニングイベント前後にあるスポーツライフスタイルの有り方を把握することにより、今後のスポーツイベントの開催に有用な知見を提供できると考える。

## 2. 先行研究

これまでスポーツイベントの社会的効果は多くの研究が行われてきた。イギリスの9つの観戦型スポーツイベントの参加者を調査し、全体的にイベント後のスポーツ参加が増加したことを示した(Ramchandani etc., 2015)。また、Kimら(2015)は観戦型スポーツイベントの開催が地域住民のスポーツへの興味を向上させること

を実証した。

先行研究において、観戦型スポーツイベントの効果を確認したが、参加型スポーツイベントに関する研究は少なかった。また、確認した限り、スポーツイベントの社会的効果に関わる研究は欧米を中心に進められ、日本においてはあまり研究が行われていない。今後、健康的な地域づくりを検討していくには、地方自治体が開催するスポーツイベントは参加者のスポーツ参加、興味、意見などに与える影響をより詳細に把握する必要があると考える。

## 3. 研究目的

本研究では、ランニングイベントの参加者を対象に、参加前後のスポーツ実施頻度やスポーツに対しての興味、関心、意見といったスポーツライフスタイルを確認する。

- ①ランニングイベント前後のスポーツライフスタイルの差異を明らかにすること
- ②参加動機、満足度、参加経験、参加費用、他のイベントへの参加といった要因はスポーツライフスタイルに与える影響のモデレート効果を検証することを目的とする。

## 4. 研究方法

<調査①>2018年11月2日に、11月3日から11月18日まで全国に開催されるランニングイベントに参加する予定者を対象に、インターネット調査を実施した(515部、有効回答率99.8%)。調査項目について、スポーツ実施頻度は「スポーツ実施状況などに関する世論調査」(2007)尺度を使用した。参加動機は Funk &

Bruun(2007)が作成したスポーツ参加動機尺度からスポーツツーリズムに関する項目を除き,14項目を用いた.スポーツライフスタイルは,北村ら(1997)が作成したAIO尺度からスポーツそのものに対する興味,関心,態度の項目を選定して5段階尺度を設定した.<調査②>2018年12月8日,調査①の対象に,調査①で確認された尺度を用いてイベント後にあるスポーツライフスタイルを把握した.結果,226の有効回答が得られた.得られたデータを用いてt検定,回帰分析,分散分析などを行った.

## 5. 結果と考察

尺度の信頼性と妥当性を検証した結果,参加動機は3因子13項目で,スポーツライフスタイルも3因子13項目で分析を行った.信頼性も,妥当性も許容範囲内であった.

以上のことから,ランニングイベント前後のスポーツライフスタイルの差異が確認された.スポーツ実施については,年間の平均値を算出し,対応のあるt検定で有意に低下することが確認された.(図1).またスポーツライフスタイルの各因子の得点を算出して分析した結果,有意な差は確認されなかった(表1).

モデレート効果の検討において,過去の参加経験,参加した距離,支出による差異は全面的には認められなかった.調査期間中に他のスポーツイベントの参加経験とスポーツ効果とスポーツ志向において,参加した者がプラスの,参加しなかった者がマイナスの影響を受ける傾向があることが示唆された(表2).

総括として,短期的に,ランニングイベントの参加は,スポーツ実施,スポーツに対する興味,関心,態度といったスポーツライフスタイル全体的にネガティブな影響があることを示した.スポーツイベント参加前に目標を達成するために参加者のスポーツ実施頻度などが高くなり,

逆にイベント後にスポーツ実施頻度と継続意欲が減少してしまう可能性があると考えられる.一方,調査期間中にランニング以外のスポーツイベントに参加することによってネガティブな影響が緩和されることが明らかになった.よって,豊かなスポーツライフスタイルの形成に向けて,スポーツイベント主催者にとって,持続的・定期的にスポーツイベントを企画すること,多様な種目のスポーツイベントを開催することが重要だと考える.

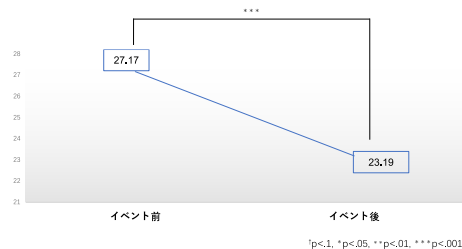


図1 スポーツ実施頻度 (t検定)

表1 イベント前後 (t検定)

|           | イベント前 |      | イベント後 |      | t値   | 有意差  | 比較  |
|-----------|-------|------|-------|------|------|------|-----|
|           | M     | SD   | M     | SD   |      |      |     |
| スポーツ効果    | 22.57 | 4.15 | 22.11 | 4.94 | 1.6  | n.s. | 前>後 |
| スポーツ志向    | 9.75  | 2.67 | 9.44  | 2.66 | 1.77 | n.s. | 前>後 |
| 間接的スポーツ行動 | 14.31 | 3.62 | 14.27 | 3.77 | 0.22 | n.s. | 前>後 |

\*p<.1, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表2 他のイベントの参加経験(分散分析)

|           | 他のスポーツイベントに<br>参加した |      | 他のスポーツイベントに<br>参加しなかった |      |
|-----------|---------------------|------|------------------------|------|
|           | M                   | SD   | M                      | SD   |
| スポーツ効果    | 0.13 †              | 3.74 | -0.96 †                | 4.73 |
| スポーツ志向    | 0.13 †              | 3.74 | -0.96 †                | 4.73 |
| 間接的スポーツ行動 | 0.09                | 3.56 | -0.16                  | 3.15 |

†p<.1, \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

## 6. 研究の限界と今後の課題

研究の限界として,縦断的調査期間が短いこと,対象としてイベントが多かったこと,他種目への汎用性に欠けることが挙げられる.様々な種目において代表とするイベントの参加者に対し,長い期間の追跡調査での比較検討が課題である.説明力を向上させるため,尺度の再検討をする必要がある.今後,他の人口統計的基準や行動特性での調査,分析を継続的に行うこと,他種目への応用などにより,様々なスポーツイベントの開催に有用な知見になれば幸いである.